

## ピカチュウランナー

走ることも運動も得意ではなかった私がハーフマラソンを走ることになるとは思ってもいなかった。私は、四十歳になった時、医者に減量を勧められ、朝夕のジョギングを始めた。そのジョギング友達に誘われて、二月に開かれる呉とびしまマラソン大会の五キロの部に出場し完走した。その達成感が忘れられず、次はハーフマラソン（二一・〇九七五キロ）に挑戦しようと、自然とそういう気持ちになった。呉とびしまマラソン大会は誰もが気軽に参加できる市民マラソン大会だ。しかし、気軽と言っても、苦しかったら歩けばいいとか、途中でリタイアしてもいいというような気持ちで出場するのは嫌だった。きちんと練習し、自分なりにベストを尽くして完走する。そうでないと、大会を運営する人たちや沿道で応援してくれる人たちに対して失礼な気がしたのだ。

迎えた大会当日、初めてハーフマラソンを走るといふ心地よい緊張感の中でウォーミングアップを始めた。そんな時だった。少し向こうからにぎやかな声が聞こえてきた。見ると、妙な扮装をしたランナーの一人がいた。頭に真っ赤なカニのかぶり物をつけたもの、ウサギやパンダなどのかぶり物をしたもの達が楽しげにしゃべっていた。あきれたことに、ピカチュウの帽子をかぶり、全身を黄色いコスチュームで包んでいる人も見えた。

（何なんだ、この連中は……。もちろん走るときの服装は自由だろう。どんな格好で走ろうとその人の勝手かもしれない。しかし、あまりにもふざけている。聞こえてくる話も、コスチュームが似合っているとかいないといった、走ることとは関係ないものばかりだ。大会を運営する人たちや応援してくれる人たちだけでなく、この日に向けこつこつ練習してきた多くのランナーたちにも失礼じゃないか。できるだけこんな連中からは離れて走ろう。いや、負けてたまるものか。）

私は、そう思いながらスタートを切った。ところが悔しいことに、多くのコスチュームランナーたちは、さすがに二十代の若者らしく、私よりもずっと速いペースで沿道の応援に応えながら、私を抜き去っていった。スタートして十キロ地点のタイムは五十分を切っていた。私の目標は二時間を切ることだったが、抜かれまいと無理をしたせいか、私にとって、このタイムはあきらかにオーバーパーペースになってしまっていた。（こうなったら、せめてあのピカチュウだけには負けてたまるか。）

私は、そう思いながらピカチュウを探して後方を見た。ピカチュウの姿は見えなかった。

（当たり前だ。あんなふざけた格好をするやつに負けるはずがない。）

私は、少し安心をして、ふたたび前方を向いて走り始めた。その時だった。小さな段差につまずいて右足首を強くひねってしまった。

（しまった！）

と思ったときはもうすでに遅かった。走ると右足を激痛が襲った。ゆっくりな



ら走れそうだが、ゴールまでまだ十キロ以上あった。すでにオーバーペースで疲れ切っていた私は、張り詰めていた気持ち切れ、立ち止まってしまった。

そんな私に、沿道からはたくさんの声援が浴びせられる。目標の二時間を切ることはもう絶望的だった。目標を失った私にとって、声援はかえって辛かった。

(この痛みでは頑張りようもないじゃないか。というか、これでも精一杯がんばっているんだ。だいたい、あのコスチュームランナーの連中が悪い。あんな連中がいるから……)

愚痴じみたことを心の中でつぶやいていた。沿道の応援に対して、私は悲壮なランナーの仮面をかぶり、無言のまま、痛む足をオーバーに引きずりながら、ゆっくりとだがゴールへ向かって、走り始めた。

ラスト三キロ地点。私はとうとうピカチュウにも追い付かれてしまった。

ピカチュウは人気者だった。

「わあ、ピカチュウだ！ピカチュウ、がんばれえ！」

ピカチュウは声援を送ってくれる子供たちを見つけては、笑顔に向け、

「応援、ありがとね！最後までがんばるよう。」

と、まるで自分が声援する側のように大きな声で応える。それから、また前を向いて走り始める。そのたびに私は、ピカチュウを抜くことができるのだが、また、すぐに私に追い付いてくる。どうやら足を痛めた私に同情して並走するつもりらしかった。けれども、そのことに気が付いた私は、逆に、いらついていた。私はピカチュウランナーの横顔をちらっと見て少し驚いた。その男性は、おそらく六十歳をこえているように思われた。そばを走るうち、もう一つその人の左足の動きが妙なことに気が付いていた。

その時、男性が私に話しかけてきた。

「ラスト三キロ、このあたりが一番苦しいですねえ。足をどうかさされましたか。

あともう少しですよ。」

「ありがとうございます。ところであなたも、その左足を痛められているようですが……」

「ああ、ばれてしまいましたか。気付かれないようにしていたんですけどね。

ピカチュウがケガをして走っていたら子どもたちに心配かけちゃいますからね。実は、私の左足、コスチュームで分からないでしょうが、すねから下は義足なんですよ。」

(えっ、義足?)

「とにかくお互い最後まで頑張りましょう。」

笑顔でそう言ってくれ私を追い抜いていった。

私は驚き、自分が猛烈に恥ずかしくなった。

私は右足をかばうのも忘れ、再びペースをあげピカチュウに追い付くと、笑顔で宣言した。

「ピカチュウには負けませんよ！」

その日から、いつか自分もピカチュウの格好をして走ることが私の目標の一つになった。

